The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

詔令の文学性（その一）

――傅亮の場合――

西紀昭

序言

梁の昭明太子の編になる「文選」は、六朝以前の優れた文学作品を総集したものとして名高く、又唯一のものである。ただ、梁の時代には、「文選」に収められている作品よりもはるかに数多くの作品が存在していたことは、多くの類書や諸書に引用された作品名等から明らかである。してみると昭明太子は何らかの基準にもとづいて、「文選」に収録すべき作品とそうではない作品を区別したにちがいない。言いかえると、何が文学かという概念規定をキチンとした上で作品を選別したにちがいない。その昭明太子の文学の概念を最もよく示しているのが、「文選序」の文章である。この「文選序」の中でも、これこそ昭明太子の文学観を示すものとしてよく引用されるのが、「事出於沈思、義歸乎翰藻」という二句である。この二句の意味を知ることが、とりもなおさず昭明太子の文学観を知ることになり、六朝を代表し後世に多大な影響を与えた文学観を解明することになるわけである。

この難解な二句の意味について、清朝の阮元は、「書梁昭明太子文選序後」や「文韻説」の中で、〝翰藻〟に重点をおいて、「あやある美しいもの」つまり、修飾されたものが文学であると理解しているようであり、又、民国の朱自清は、「文選序事出於沈思義歸乎翰藻説」で、〝沈思・翰藻〟よりも〝事・義〟に重点をおいて、事義とは「ある典故を引いて、その理を実証すること」と、典故を用いて修飾したものが文学であると理解している。又、小尾郊一博士は、これら先人の説の誤りの部分を訂正しながら、厳密な考証を重ねてこの二句の意味を解釈しておられる。今その結論部分だけを引用させていただくと、「事と義は同じもので文の内容ということであり、沈思は作者の独創ということである。又翰藻とは修飾のことであるが、阮元のように狭い意味ではなく、広い意味での技巧をこらしたものという意味であろう。そして重点は翰藻の方にあるようだが、これは当時にあっては万人の言うところで、前の沈思――独創の方こそ注目すべきである。」と結論づけておられる。

結局、昭明太子の文学観というのは、「内容があり、独創的であり、典故や対偶などの広い意味での修飾の加わった文章」と言うことができよう。

筆者も「事出於沈思、義歸乎翰藻」の意味を理解しようと志しているものであるが、先哲の行なわれた方法とは逆の方向から考究してみたいと思う。つまり、先ず「文選」に収録された作品を分析してその文学的な特徴をぬき出し、その多くの特徴を帰納して、「文選」全体を包括する特徴を導き出し、その現れた文学的特徴と「事

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

出於沈思、義歸乎翰藻」とを重ね合わせて、この二句の意味を理解しようとするものである。

今、分析すべき作品として、先ず「詔令」という文章をとり上げた理由は、これらの文章は内容が指定されたものであり、その文学的特徴は表現方法の中にあると考えたからである。又作者として傅亮をとり上げた理由も、彼が詔令の文章にすぐれているという理由の他に、彼の書いた文章は多く宋の武帝劉裕に代って書いたもの、つまり代筆の文章であるという理由からである。代筆であれば、その特徴は表現内容よりも表現方法の方により強く現れると思われるからである。

「詔令」と略称した文体を「文選」中の分類で言えば、「詔」「冊」「令」「教」「文」等であり、傅亮の作品は「教」の中に二首収録されている。「爲宋公修張良廟教」と「爲宋公修楚元王墓教」である。今この二首について略説してみたいと思う。

一

作品を解釈する一助とするため、先に作者の生涯を見ておく。傅亮についての記録は「宋書」巻四十三と「南史」巻十五に本伝があるが、その記述は殆んど同じであるので、「宋書」によって見てゆくことにする。

傅亮、字は季友、北地靈州の人である。その家系は、傅玄、傅咸、傅瑗、傅亮と続く学者の家柄であり、傅亮もその血筋を引いて、「博く經史に渉り、尤も文詞に善し」と記録される。その生年は、元嘉三年に文帝の誅に伏した時五十三才であったことから逆算して、東晉孝武帝の寧康二年（三七四）である。有名な淝水の戦いはこれから九年後のことである。

三十才以前に桓玄の従兄桓謙の中軍行参軍となり、彼が三十才の元興二年十二月、桓玄が簒位すると今度は桓玄に仕えて祕書郎となる。しかし、翌年桓玄が、劉裕、劉毅、孟昶、何無忌らの義旗に敗れると、今度は孟昶に仕えてその建威参軍となる。翌義熙元年には員外散騎侍郎に除せられて、詔令を掌り、領軍長史に転ずるが、母の死に遭い喪に服す。母の喪があけると今度は劉毅に仕えて、撫軍記室参軍となり、又領軍司馬にも補せられる。これが恐らく義熙五年又は六年のことである。義熙七年には散騎侍郎に遷り、また中書黄門侍郎に転じている。そしてこの年、劉裕に目をつけられ、その幕下に入る。傅亮三十八才の時であり、これから、劉裕と傅亮の、文章を接点とした強い結びつきが始まる。一方は武力をもち帝位を簒奪するほどの勢力を有しながら文章もろくに書けない劉裕、一方はすばらしい文才と学識をもちながら武力を欠くために強い武力をもった人間にくっついてしか自分の政治的野心を満足させられない典型的公卿である傅亮。ただしこの二人が確固とした関係に入るのは、これから六、七年たってからである。この事を「宋書」本伝には次のように記す。「高祖登庸之始、文筆皆是記室參軍滕演、北征廣固、悉委長史王誕、自此後、至于受命、表策文誥、皆亮辭也」。これで見ると、劉裕は朝廷に出入し始めたころ（それは劉裕が桓玄のもとにあって、もとの自分の上官であった劉牢之を伐った元興二年と思われるが）は、自分の書くべき文章は全部記室参軍の滕演に書かせており、北方の廣固のあたりを討伐してからは、（劉裕が廣固に北征したのは義熙五年のことである。）文章は全部長史の王誕にまかせて代筆させていた。そして「これより後、受命に至るまで」の

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

文章は全部傅亮の作であるということがわかる。結局劉裕は自分では文章の書けない男である。その為、常にすぐれた文章の書ける男をさがしており、気にいった文章を書く人間が見つかると、自分の文章は全面的にその人にまかせている。しかし劉裕の文章をまかせられた人も、自分以上にすぐれた文章を書く人間が現れると、すぐに見捨てられてしまう。安閑としてはおれなかったろう。滕演は元興二年（四〇三）から義熙四年（四〇八）ころまで、王誕は義熙五年（四〇九）から劉裕の信頼が傅亮にうつるまで、それ以後はすべて傅亮ということになっているが、問題なのは、王誕から傅亮にうつったのは何年かということである。先ほどあげた「宋書」本伝では「自此後、至于受命」と記す。「此」がいつをさすのかはっきりしない。本伝では一応、永初元年の項に入っており、この「此」というのも、永初元年（四二〇）ととるのが、最も妥当のようであるが、二・三疑問が無いわけではない。その一つは、傅亮は義熙十二年（四一六年）に既に「策加宋公九錫文」を書いているという点である。「九錫文」を傅亮に書かせるということは、すでに傅亮に全面的に信頼がうつっていたのではないかと疑わせる。その二つは、本伝の書き方の問題であるが、逸話的な記述がまじっており、その正確な年代と事実関係の連続をボカしてしまっているということ。ここもその一つの例である。このように疑いが無いわけではないが、結論から言えば、「此」は永初元年をさすと解しておく。理由は義熙八年から受命まで劉裕は大変な忙しさでライバルを倒し、自分の禅代への布石に奔走しており、代筆する人間も一人ではまにあわず、数人の人間が競争で劉裕の為に文章を書いていたと予想されるからである。恐らく、王誕と傅亮の二人が劉裕の信頼を自分一人に集めようと必死で名文を書いていたのであろう。その期間が義熙七年から永初元年までの八・九年であったと考えられる。又、本伝の書き方の問題は、「高祖登庸之始～悉委長史王誕」を挿入句と考え、「自此後」は永初元年をうけると考える。

義熙七年、劉裕に仕えるようになってからの二人の結びつきは、以上のようなものであったろう。

もとにかえって、義熙七年以降の事跡を見てゆく。本伝では劉裕に仕えた時の逸話を記述した後、「會西討司馬休之、以爲太尉從事中郎掌記室、以太尉參軍羊徽爲中書郎、代直西省、亮從征關洛、還至彭城」とだけ記す。劉裕が司馬休之を討ったのは義熙十一年のことであり、その間の四年間については何も記述がない。この期間は劉裕にとっては、自分のライバルを次々に倒していった、非常に重大でしかも危険な時期であった。今本紀の記述によって、劉裕の動きを見てみると、義熙七年までに大体外敵との戦いに区切りをつけ、八年には、劉藩と謝混を殺し、すぐに劉毅討伐の軍を起して一ケ月後にこれを殺している。翌九年には、諸葛長民を殺し、その弟も誅している。十一年正月から司馬休之討伐の軍を起し、四月にこれを羌に追いはらっている。そして劉裕の官職も七年に太尉であったのが戦いごとに多くの官職が加えられていった。

恐らく傅亮もこの間、劉裕の動きについて奔走していたことと思われる。ただ十一年になって始めて劉裕の記室となったことから考えて、劉裕の大幅な信頼をかち得たのは、義熙十一年であると思われる。

「宋書」本伝の記述は先ほどの義熙十一年の「～還至彭城」のあと、すぐに「宋國初建、令書除侍中、領世子中庶子、徙中書令、領

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

中庶子如故、從還壽陽」と続く。「宋国初めて建つ」とは、劉裕が相國となり宋公に封ぜられたことをさすと思われるが、これは義熙十四年のことである。つまり十二年、十三年の記述は一切ない。この二年間、劉裕は又北方と戦争を始める。国内には自分に敵対するような勢力は無くなり、晉朝の為に北方を回復する戦いを始めたわけである。しかしこれはあくまでも晉朝を倒して、自分が帝位を簒奪する時にむけてのポーズである。事実、この間に洛陽、長安などを攻め落し、姚泓を執えたりするが、その地を守ろうとはしていない。北方を回復したという名声だけが必要であったからだろう。本論文で分析しようとしている二首の作品は、実はこの義熙十三年、北方への征討の途中で書かれたものである。「宋書」巻二武帝紀中にはこのことを、「十三年正月、公以舟師進討、留彭城、公諱鎮彭城、軍次留城、經張良廟、令曰、……」と記し、このあと修張良廟教の全文が記録されている。このあたりの傅亮の事跡の記述が本伝には無いわけである。

先ほどの義熙十四年（四一八）のことである「宋公初建〜」のあと、本伝にはかなり長い逸話が記されている。これは後にもふれるが、翌年の元熙元年（四一九）の話であると考えられる。その話というのは次のようなものである。

「高祖には受禅の気持があったが、仲々口には出しかねていた。そこで朝臣を集めて宴会を催し、その最中におもむろに口を開いて、私は国内平定に努力し、晉室の復興に努め、南征北伐して四海を平定した。そして功なり業あらわれて、遂に九錫を荷うまでになった。もう年老いたし、物は満つることを戒めるともいうから、このへんで晉の朝廷からいただいた爵位はすべて返上して、引退したい。と言ったところ、群臣たちは唯その徳をほめ称えるばかりで、誰もその真意をさとるものがいなかった。やがて坐は散じた。傅亮は門の外まで出たところで高祖の真意を悟り、すぐ引き返して、高祖に、私はしばらく都に還って（晉の朝廷に仕えて）みようと思います。と申し上げた。高祖はその意味を理解して、ただ、何人くらい送ろうかとだけ聞いた。傅亮は、数十人いれば十分でしょうと答えて、高祖の辭を奉じて出発した。」というものである。これは劉裕が始めて帝位簒奪の意志を明らかにしたものであり、それを最初に理解し、その為の画策を始めたのが傅亮であったということを示している。この後、恐らく傅亮は劉裕にとって文筆の士というのみではなく、政治的にもかけがえのない人物となったと思われる。

「宋書」の本伝ではこの話のあと、「至都、即徵高祖入輔」と記されている。これを「宋書」武帝紀に照らし合わせてみると、「元熙元年正月、詔遣大使、徵公入輔」という記述と一致する。従ってこの話及び傅亮が都の朝廷に入って、劉裕の帝位簒奪の為の工作を開始したのは元熙元年ということになる。

そして翌元熙二年六月、劉裕は晉の恭帝の禅位をうけて、ついに帝位につく。国を宋と改め、年号を永初と改める。元熙二年がすなわち永初元年である。晉の朝廷内での傅亮の工作について「宋書」は何も記さないが、「晉書」の恭帝紀には次のように記す。「元熙二年……劉裕至于京師、傅亮承裕密旨、諷帝禅位、草詔請帝書之……」。これで見ると傅亮は恭帝の傍にあって、劉裕への禅位を迫り、禅位の詔の草稿まで書いて恭帝に清書するよう迫ったと記されている。余談にわたるが「宋書」巻二武帝紀中に収録されている晉帝の禅位の詔の作者は前の「晉書」の記述から見て、傅亮と決定し

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

てもよいのではなかろうか。

「宋書」本伝の記録に返る。先ほどの「至都、即徴高祖入輔」のあとは、永初元年の記録になる。中書令はもとのままで、太子詹事に遷り、佐命の功をもって、建城縣公に封ぜられる、食邑二千戸、直中書省となり詔命を一手にひきうける。このあと前にあげた「高祖登庸之始……」以下の文章が続いているわけである。この永初元年以後はトントン拍子に官位は進んでゆく。永初二年には中書令太子詹事はもとのままで、尚書僕射に転じ、翌々年の永初三年劉裕が病気で崩じた時には、徐羨之、謝晦らとともに「顧命」を受けている。文章を離れて、政治家として確固とした地位を築いていたということが知られる。

二代目の天子少帝が即位すると、傅亮は中書監、尚書令に進み、翌年には護軍将軍となっているが、この年、徐羨之らと謀って少帝を弑し、劉裕の第三子義隆を帝位につける。これが三代目の天子、太祖文帝である。太祖が即位すると、散騎常侍、左光禄大夫、開府儀同三司を加えられ、爵は始興郡公、食邑四千戸に進められる。しかし太祖が即位して三年目の元嘉三年正月、徐羨之ともどもとらえられて誅に伏した。時に傅亮五十三才。

この二人が太祖に殺された理由は「宋書」「南史」ともに記していないが、太祖の実兄であった少帝を殺したことであったと思われる。それは文帝の「誅徐羨之等詔」に明らかである。傅亮の一生を概観すると、一言で言って、文筆一本で位人臣を極めたということになろうか。父瑗の官品は五品であり、祖父咸は三品、曾祖父の玄は三品であった。しかし、亮の散騎常侍、左光禄大夫、開府儀同三司というのは一品である。特別な戦功もなく、朝廷に於ける政治的能力もそれほど優れていたとは思われない傅亮がこれほどの地位に登れたのは、一つには、その文章によって劉裕に気に入られ、二つには、文才によってかちえた劉裕の信頼を土台として、人の心理を巧みにつかみ、政治の裏工作にその手腕を発揮したという理由からであろう。まさに文筆一本で位人臣を極めたわけである。してみると劉裕の為に書かれた傅亮の文章というものは、たとえそれがドス黒く汚れたものであるにせよ、血と汗をふりしぼって書かれた結晶であるということは容易に想像されうる。

傅亮の一生で今一つ注目すべきことは、主君を非常に多くとりかえているということである。これは見方をかえてみると、伸びる人間と没落する人間を見分ける能力がすぐれていた、機を見るに敏であったと言うことが出来る。桓謙、桓玄、孟昶、劉毅、劉裕、とならべて見ると、桓謙、桓玄はともに建平、元興年間は劉裕の上官、というよりも劉裕は桓玄の幕下に近い。孟昶は桓玄を討った時は劉裕と同僚、劉毅は義熙末年、最後まで劉裕と勢力を二分した人物、といったぐあいである。傅亮はこれらの人物の中を実に巧みに泳ぎ回っている。しかしこのことは逆に劉裕の幕下に入ってからは決してプラスに作用することはなかったであろう。それだけに、筆一本を頼りに劉裕の以前からの部下以上の信頼をかちえようとすれば、その苦労は並大抵ではない。そして傅亮はそれをなしとげた。その文才のほどおして知るべし。

二

次に本論の作品分析に入る。とり上げる作品は「爲宋公修張良廟教」と「爲宋公修楚元王墓教」である。どちらも「文選」巻三十六

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に収められている。テキストとしては、「京都大学影印旧鈔本文選集注残巻」を使用する。集注本ではどちらも巻七十一である。先ず「爲宋公修張良廟教」を見てゆく。

爲宋公修張良廟教一首

綱紀、夫盛德不泯、義存祀典。微管之歎、撫事彌深。張子房、道亞黄中、照隣殆庶。風雲玄感、蔚爲帝師。夷項定漢、大拯横流。固已參軌伊望、冠德如仁。若乃神交圮上、道契商洛。顯默之際、窅然難究。淵流浩瀁、莫測其端矣。塗次舊沛、佇駕留城。靈廟荒頓、遺像陳昧。撫跡懷人、永歎寔深。過大梁者、或佇想於夷門、遊九原者、亦流連於隨會。擬之若人、亦足以云。可改構棟宇、脩飭丹青、蘋蘩行潦、以時致薦。抒懷古之情、存不刊之烈。主者施行。

「宋書」武帝紀に明記される如く、この作品は義熙十三年正月、北征の途中の作である。その内容は、張良の廟を修理せよ、という命令を官吏達に伝えるものである。北征そのものが帝位簒奪に向けて、名声を得る為のポーズであることは前に述べたが、前人の墓や廟を修復することは名声を博する為の絶好の材料であったに違いない。この作の他にも「修楚元王墓教」、「修復前漢諸陵教」、「至洛陽謁五陵表」など多くの、陵墓を修理し、しかもそのことを天下に公表する文章がある。劉裕がいかに名声を得る為に先人の廟や陵を修復することを重視していたか理解できよう。

「盛德不泯、義存祀典」（盛德の泯びざるは、義祀典に存すればなり）先ず、すぐれた徳はその内容が祀典の中に残され永遠に滅びることはないと、大きく、古き廟を修理する為の論理的根拠を提示する。論理的根拠の提示は下二句もそうであるが、下句と比べてこの二句の叙述は客観的である。李善注によれば、「左氏伝」昭公八年の「盛德必百世祀」と、「礼記」祭法の「非此族也、不在祀典也」、「毛詩」桑柔の「靡國不泯」を典故とする。典故そのものは特別なものではないが、「德」「不泯」「義」という各語を結びつけて、徳の不朽性という復古的テーゼを作り上げたのは傅亮だけで、他の人には見られない。傅亮独特の文章表現である。典故の組み合わせの斬新さというのがこの二句の特長であろう。「不泯」の二字も、傅亮は徳や名声が不朽であるという時、常にこれを使う。例えば、「為宋公修復前漢諸陵教」（藝文類聚四十）の「盛德之烈、義在不泯」、「為宋公修楚元王墓教」（文選巻三十六）の「信陵尚或不泯」、「為宋公求加贈劉前軍表」の「俾忠貞之烈、不泯於身後」などである。特に「修復前漢諸陵教」は、ここと大変よく似た文章表現である。傅亮自身、この三語を結合した表現は自信のあるものであったのかも知れない。

「微管之歎、撫事彌深」と続くこの二句も、徳の不朽性を述べて、廟修理の論理的根拠を提示したものである。前の二句が「存」で客観的に表現したのに対し、この二句は「深」の字で主観的に表現している。李善注によれば、典故は「論語」憲問の「微管仲、吾其被髪左衽矣」である。これは子貢が「管仲非仁者與、桓公殺公子糾、不能死、又相之」と質問したのに対して孔子が答えたことばである。本来「微管」の二字で区切れる句ではない。にもかかわらず傅亮は明らかに「微管仲、吾其被髪左衽矣」という孔子の詠歎のことばを「微管之歎」四字で表現している。文法的に言えばおかしい切り方で典故を使用して文章を書いている。かなりシャレた言い方

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

で、言わば傅亮の造語であると言ってよかろう。「文選」での用例を見ると謝朓、任昉らがこの語を使っているが、元祖は傅亮である。「撫事彌深」について言えば、李善は何も典故を挙げていないが、「撫事」という語は「尚書」洛誥に「厥若彝及撫事如予」とあるのをふまえたものと見てよかろう。孔安国傳には「撫事」を「撫國事」と解し、正義には「撫循國事」と解している。五臣注が「今宋公撫思此事、彌深於情」と解するのは、主語を宋公とするのは正しいが、「撫事」の解はちがうように思われる。「文選」における「撫事」の用例を見ても、傅亮以外この語を使った人は無い。典故はあるが、非常に珍しい語で傅亮の造語に近いといってよかろう。結局この二句の特長は、典故を一ひねりしてシャレた表現にした、いわば造語的な面白さにあると言えよう。

以上四句で廟修理という行為の根拠となるテーゼの提示を終り、以下十四句は廟に祭られている張良その人の人柄、行為などをほめ讃える。

「張子房、道亞黄中、照隣殆庶」先ずその人柄、学徳をほめる。この二句の典故について李善は、「周易」坤卦文言傳の「君子黄中通理、正位居體」と「周易」繫辭傳下の「顔氏之子、其殆庶幾乎」をあげる。「道亞黄中」（道は黄中に亞ぎ）。先ほどの「微管」「撫事」と同じく、この二字だけとり出すのは非常に難しいと思われる典故である。無論、前人にこの語を使ったものはいない。「黄中」の意味について正義では「黄中通理者、以黄居中兼四方之色、奉承臣、職是通暁物理也」と解す。黄は多くの色の中心で、中庸の位置にいるということであろうか。この二字を「道亞」二字に続けて、人物を評する文章とした発想は非凡である。「宋書」本伝の「博渉經史、尤善文詞」なる人物にして始めて作れる句である。傅亮もこの句には自信をもっていたようで、別の文章でも使っている。「侍中王公碑」（類聚四十七）に「體亞黄中、道及微管」とあり、この文章とよく似ている。「黄中」「微管」「撫事」などは、作者自身、気に入ってしかも自信のある、「傅亮の作ったことば」という気持を持っていたのではなかろうか。「文選」中の用例を見ても、「黄中」なる語を使った文人は一人も居ない、傅亮だけである。

「照隣殆庶」、これ又「周易」をふまえるが、正義に「其殆庶幾乎者、言聖人知幾、顔子亞聖、未能知幾、但殆近庶慕而已」と解するのに従えば、「幾」は目的語、「殆」は近いの意味の形容詞、「庶」は慕の意味の動詞というとになるが、句全体としては、「殆」が動詞、「庶幾乎」が目的語となる。従って「殆庶幾」の三字は「殆、庶幾」とは切れるが「殆庶、幾」とは切れない。しかし傅亮は敢えてそのように切り、「照らかなること殆庶に隣す」と続ける。これ亦「微管」と同じ造語法である。ただこの句は後世の文人にかなり影響を与えたようで、「文選」中の用例を見ても、任昉の「齊竟陵文宣王行状」に「公、道亞生知、照隣幾庶」とあり、又劉峻「辨命論」に「伊顔之殆庶、焉能抗之哉」とある。特に任昉の例は明らかにこの傅亮の文章を意識して典故として使っている。傅亮の文章が齊梁の文人達に典故として使われたということは、傅亮自身、何らかの典故に基づいて文章を書いたにもかかわらず、その書かれた文章は元の典故からは独立して、新しい語として認められたという一つの証左ではあるまいか。蛇足であるが「殆庶」の意味は、上に「顔氏の子」とあるところから、明らかに顔回をさすものである。又「照隣」なる語も、任昉がそのまま借用している如く、珍しいこ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

とばで、普通ならば「道亟黄中、○鱗殆庶」とピッタリした対句になるような文字が入るのであろうが、対句に少々変化をつける為に、「道」とはピッタリと合わない「照」の字を使ったものであろう。ここも傅亮の苦心のほどをしのばせる。結局、この二句の特長としては、前と同じく、ある典故を使いながら、文法的な区切りを問題にしないで抜き出し、新造語であるかのように表現し、しかも元の典故を色濃く感じさせる点であろう。言わば、意味の上では典故をふまえた古典的表現法、言語表現の上では清新で独創的な表現法であるとでも言えようか。

次に、「風雲玄感、蔚為帝師」。これ以下四句は張良の行動についてほめる。李善注によれば「風雲」は「周易」乾卦文言傳の「雲從龍風從虎、聖人作而萬物覩」を典故とする。張良が始めて世に現れたさまを、風雲が龍虎に感じて起るようだと表現する。典故の用い方としては正当的である。「蔚為帝師」、李善注は「漢書」張良伝を引いて、張良が劉邦の師となったことを説明する。この句は、事実、つまり張良の行動をそのまま述べたものである。表現方法としてはこの二句には特別なものは無い。内容が張良の行為そのものを述べる時はそれほど作者の腕のふるいようはないようである。

次に、「夷項定漢、大拯横流」。これも張良の行為についてのべる。項羽を滅ぼし、漢の王朝を成立安定させたということを、実に簡潔に「夷項定漢」とまとめる。後の方もそうであるが、事実関係の叙述は実に簡潔である。これもこの文章の一つの特徴であろう。「大拯横流」は李善注によれば、「孟子」の「洪水横流、氾濫於天下」を典故とする。よこしまなもの（項羽）が天下に荒れ狂うのを「横流」と表現している。「文選」中に「横流」の使用例は多いが、皆「水横流」の形で、典故である「孟子」と密着している。傅亮のこの文章の如く、世の乱れた様子を表現し、しかも、「大いに横流より拯う」と「すくう」と結びつけた例は、ここの他ただ一例のみである。陸倕の「石闕銘」に「拯茲塗炭、救此横流」とあるのがそれであるが、これも先ほどの「殆庶」と同じく傅亮の文章を典故として用いたものと思われる。又傅亮自身の他の作にも用例が見られる。「修復前漢諸陵教」の「道拯横流、功高百代」である。「拯横流」も造語とまでは言えないが、「傅亮のことば」と言ってよいかも知れない。以上の四句、事実について記述した部分は表現は比較的平易で簡潔、典故も常識的な使い方しかしていない。ただ注意すべきことは、この四句が平易であればあるだけ、前の二句の表現の斬新さ、独創的な文章表現がよりきわだつわけである。或は作者はそこまで意識して平易な表現を敢てしたのかも知れない。事実、以下二句に又前と同じシャレた典故の使い方が見られる。意識してとりまぜているのであろう。

「固已參軌伊望、冠德如仁」。これまでずっと四字句が続いて、初めての六字句である。声調に変化をつけたものである。これは下句の「若乃」と相まって、この「固已」も虚字であるという点から明らかである。六字句とは言え、上の虚字二字と下の実字四字にはっきり分けられる。無論、「固已」が上の文と下の二句を強く結びつけ、「若乃」がその下の四句を次の二句に強く結びつけるという働きはもっているが、やはり、上二字が虚字で下四字が実字という構成から見て、声調をととのえるというのが、六字句をここに入れた最も大きい理由であろう。これは終りごろにある六字句の対句と比較してみれば明らかである。「參軌伊望」、「伊望」は伊尹と呂望であ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

るが、「軌を參ず」という言い方は珍しい。張良の軌跡は伊尹、呂望と肩を並べるほどにすばらしい、という意味であるが「文選」は勿論、他にも「軌を參ず」という表現は見あたらない。傅亮の独創になる表現であろう。次の「冠徳如仁」、李善は「冠徳」については班固「典引」をあげる。比較的新しい表現であろうか。「文選」中にも班固と傅亮以外使用例はない。「如仁」について李善注によれば、典故は「論語」憲問の「子曰、桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也、如其仁、如其仁」である。つまり「其の仁に如かん」という三字句の中の「其」を除いた「如仁」という表現の中に、元の典故の話すべてを含めて、管仲の代名詞として使われているわけである。この孔子の答は子路の「桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死、曰未仁乎」という質問に対してなされたものであるが、「微管」の所の話と非常によく似ている。

ここで表現方法を離れて、作者傅亮の意識について少し考察してみたい。手がかりは、「微管」「如仁」とことば（傅亮の造語）は変えてあるが、管仲が二度も登場することである。張良が優れた人物であるという為に引き合いに出された人物を列挙してみると、「微管」の管仲、「殆庶」の顔回、「伊望」の伊尹と呂望、そして「如仁」の管仲となる。このうち「伊望」は二人で二字、しかも姓であげている。これに対して、管仲と顔回はそれぞれ「論語」と「周易」という典故をふまえ、しかも三つとも孔子の言である。しかもその抜き出し方は傅亮の特徴のよく出た、意味上では典故主義、表現上では造語主義という、強く印象に残る表現方法をとっている。この点から考えて、作者はやはりこの二人を強く印象づけたがっているようである。ただ顔回の場合、人物としては問題ない。しかし、「張良なる人物は……」と切り出した後に続く「道亜黄中、照隣殆庶」ときた「殆庶」は「黄中」と対にすべき語であり、「周易」中に登場する人物でなければならず、「黄中」に匹敵する重々しさを必然的にもってくる。従って表現の仕方はこうならざるを得ない。顔回という人物よりも表現上の問題である。そこで問題は管仲である。先ず典故となった「論語」で見ると、質問者の子貢、子路ともに管仲の仁に対して疑問をもっている。そして孔子の答もしごく歯切れが悪く、質問にまともに答えていない。「もし管仲がいなかったら中国は礼儀のない夷狄と同じになっていたろう」とか、「桓公が兵車で諸侯を九合しなかったのは管仲の功績である」とか、質問の「自分の主君公子糾を殺した、敵である桓公に仕えて相となった管仲がはたして仁者か」という論理は無視した解答に終始している。あるいは孔子自身、管仲の行動には否定的な考え方ももっていたのではないか。いずれにせよ、管仲には不忠の臣という暗いイメージがぬぐいきれない所がある。

最初のテーゼの提示部分に「微管之歎」という表現を使っているが、この部分は聖人と目される人物が入ってしかるべき部分である。「論語」中にはそれにふさわしい聖人賢者はいくらでも見出される。にもかかわらず傅亮がここに管仲を入れたのは、張良のことを意識して、人の家臣となった人物を選んだとも思われる。事実、伊尹、呂望はそれに当てはまる。しかしそれでも、特に管仲を選んだという理由はわからない。しかも、後で「如仁」と再度管仲が登場してくる。やはり作者傅亮は管仲に対して特別な感情をもっていると考えざるを得ない。そこで傅亮のこれまでの生き方をふり返ってみると、〈一〉で述べた如く、注目すべきことは主君を何度もか

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

えたということである。桓謙、桓玄、孟昶、劉毅、劉裕、無論今の主君は、その人の為にこの文章を書いている劉裕であるが、孟昶以外の三人はすべて、現在の主君劉裕によって殺されている。つまり元の主君を殺した人物に現在傅亮は仕えているわけである。管仲は主君公子糾が殺された後で、敵である桓公の相となった。この点で管仲と傅亮は一致する。つまり傅亮の管仲に対する特別な感情の原点は主君と自分との特別な関係にあると言えよう。無論、管仲とも一致する不忠のイメージをもって現在の主君に仕えているという感情は倫理的なものではない。逆に自分は劉裕の最初からの家臣ではなく、劉裕にあまり良く思われていないのではないか、管仲を強調すれば、管仲と共通の負い目をもつ自分のひけめが少なくなるのではないかという非常に功利的なものである。つまり、管仲は桓公に仕える前、桓公の敵であった弟公子糾に仕えていたが、結局桓公を天下を一匡し諸侯を九合するまでにした。私も以前多くの人々に仕えましたが、今あなたに仕えてからは、将来管仲と同じような働きをいたします、という、言わば管仲という名前を借りて、劉裕に自分の売りこみをしていると考えてよいのではなかろうか。直接劉裕に対してこの文章を説明する際、そこまでは言わなかったろうが、典故となった「論語」の、特に孔子が管仲を別の面から評価しようとしたところは、こと細かに説明したにちがいない。結局、作者の意識としては、張良を管仲に比しながら、実はその裏で自分を管仲に比しているものと思われる。

ところでこの「如仁」という語も傅亮の造語として、齊梁の文人によく使われている。「文選」中の例を挙げると、任昉の「爲范始興作求立太宰碑表」の「至於道被如仁、功參微官」とか、沈約の「齊故安陸昭王碑文」の「如仁夕惕之、志中夜九廻」などである。特に任昉の文は明らかにこの傅亮の文を意識して書かれたものである。つまり、「如仁」を傅亮の造語と見なしているわけである。

「若乃神交圮上、道契商洛」。これは張良の事跡を述べたものであるが、張良が黄石公に会い、圮上で一編の兵法書を受けとったという、伝説的神仙的説話にもとづいている。李善は「漢書」を典故としてあげ、「神交」の語の用例としては、班固の「答賓戯」を挙げるが、「荘子」に見える語である。続く、「顯默之際、窅然難究。淵流浩瀁、莫測其端矣」、の四句も上二句に同じく、老荘的な言語を連ねて張良の老荘的面をほめ讃えている。前に「道商洛に契す」と、張良の姿勢が晩年には商山洛山、つまり隠者の方を向いたということをうけて、「顯默之際、窅然難究」と表現する。李善は上四字の用例として、孫綽の「桓宣城碑」をあげる、「俯仰顯默之際、優遊可否之間」である。この文は既に伏しておるが、題もこの二句も全く同じものが任昉にある。孰れにしても晉宋のころ使われだした表現かも知れない。ここでは、出仕と隠棲の境界、というような意味であろう。「窅然難究」の典故に、李善は「荘子」知北遊の「而知天道窅然難言哉」をあげる。老荘にいう混然一体となって弁別し難い状態を言うのであろう。次の「淵流浩瀁、莫測其端矣」も上と同じ方向の句であるが張良の人間としてのスケールがはかり知れないことを述べる。やはり老荘の立場からのほめ方である。李善は事実の典故として「黄石公説序」を引き、語句の例として左思「呉都賦」の「泓澄淵瀁、瀕溶沆瀁。莫測其深、莫究其廣」をあげる。傅亮の表現は「瀕溶」を「淵流」に「深」を「端」に変えただけであり、明らかに左思の賦をふまえている。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

こう見てくると、老荘的な面から張良をほめた、「若乃〜」以下の表現では漢代以降の比較的近い時代の文人の作品を典故として利用しているようである。「神交」は班固を、「道契」は袁宏を、「顯默之際」は孫綽を、「淵流活濱、莫測其端」は左思をふまえている。前の儒家的言語を使用する際は經書をヒネッて引用していたのに対し、老荘的言語を使用する際は、近人の文学作品を引用していたということができよう。

一応ここまでで張良の人柄、行為についての叙述を終え、これから廟を修復することになったいきさつを述べる。しかし文章は既に半ばを越えている。本来、命令文（実用文）である「教」に於て、本論以上の修飾部分をつけ加える。傅亮の「教」を文学作品と見なしてきた、一つの原因であろう。

次の句から、北征の途中張良の廟が荒れはてているのを見た劉裕が、その廟を修復する気になったいきさつを、六句にわたって事実を主として述べる。「塗次舊沛、佇駕留城」。沛の地は今姚泓の支配下にある。故に「舊」という。「佇駕」なる語の用例は他に見られない。「停駕」という語は、「晉書」、「魏書」などに散見する。その言い方を少し変化させたものであろう。「塗舊沛に次し、駕を留城に佇む」。旅の途中立ち寄って目に入ったものは、「靈廟荒頓、遺像陳昧」。張良の廟は荒れはて、その像はちりに汚れたままの有様。「荒頓」について李善は「後漢書」をあげるが、班固の東都賦に既に見られる。しかしあまり使われる語ではない。廟中の像を「遺像」と表現するのもそう古いことではないし、多くもない。李善が引く如く、夏侯湛の「東方朔畫賛序」くらいのものである。以上四句は事実を述べているだけなので表現の仕方もそう変化をもたせたというものではない。

次の二句は、廟の有様を見た劉裕の感懐を述べる部分であるので、又經書を典故として使用する。「撫跡懐人、永歎寔深」。「撫跡」の語は集注本以外の「文選」各本は「撫事」に作る。これは「撫跡」の方が正しい。傅亮は「撫事」と「撫跡」をはっきり使い分けている。「撫事彌深」とあった「撫事」は「尚書」をふまえた「撫國事」の意味であり、「撫跡」は文選鈔に「撫覧古迹」と注する如く、「事跡をたどりみる」の意であろう。余談だが「撫事彌深」は決して五臣注に言う如く、「撫思此事」ではない。元に返って、「撫跡」なる語は他に用例を見ない。これ亦傅亮の造語だったのであろう。唯、後世の文人には注目されなかった語のようで、誰もこの語を使ってはいない。「懐人」は李善によれば、「毛詩」周南巻耳を典故とし、「永歎」は「毛詩」小雅小弁を典故とする。「懐人」にしろ「永歎」にしろ、非常に多くの文人の作品に「毛詩」を典故として使われている。典故としては最もポピュラーなものである。傅亮の典故の使い方として、これまで見てきたものと比べて、ここは誠に平易である。劉裕にもよくわかって、納得してもらえる典故をと考えたのであろうか。「永歎寔深」と歎いているのは劉裕なのである。

ここまでの六句が、廟を修理することになったいきさつである。続いて次の四句に入る。「過大梁者、或佇想於夷門、遊九原者、亦流連於隨會」、（大梁を過る者は、或は佇みて夷門を想い、九原に遊ぶ者は、亦隨會に流連す）二度目の六字句である。四字句が連続した後の六字句であるから、特に目につく句である。李善は前二句の典故として「史記」魏公子伝をあげる。「魏有隱士、曰侯嬴、年七

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

十、家貧爲大梁夷門監者」。つまり「夷門」とは大梁の夷門監者であった侯嬴のことをいう。又「過大梁者」について李善は「史記」魏公子伝の大史公舒伝を典故とする。「吾過大梁之墟、求問其所謂夷門者」である。ここの典故の部分は「微管」や「如仁」と違ってわかり易い形で抜き出されている。その点については下の二句も同じである。ついでに下の二句の典故もあげておく。「礼記」檀弓下「趙文子與叔譽觀乎九原、文子曰、死者如可作也、吾誰與歸……文子曰……我則随武子乎……」、鄭玄の注に「武子士會也、食邑於随」とあるのが典故である。

この四句、劉裕が、直接にはつながりのない張良の廟を修復する正当性を、前人にもそれと同じ例があったことをあげて、述べているわけである。夷門の話については、揚雄の「解嘲」に「或倚夷門而笑」とあったり、應璩の「與満公琰書」に「雖昔侯生納顧於夷門」とある如く、傅亮以前にしばしば典故として引用されている。ただ李善の如く「過大梁者」を司馬遷ととるのはいかがなものであろうか。張良の廟の前に佇んで張良を追懐する劉裕を、大梁の廃墟に佇んで侯嬴を追懐する司馬遷と同じだと言って、劉裕が喜ぶであろうか。逆である。宮刑を受けた人間と一緒にされては劉裕がその文章を書いた人間を罰しないはずはない。従って「過大梁者」は司馬遷ではない。これは文選鈔に「高祖微時過夷門、常想侯嬴」と注する如く漢の高祖と解するのがよいようである。劉裕は同姓であることをもって、常に漢の王室の流れであると言いたがっている。従って「過大梁者」が漢の高祖であれば劉裕を高祖に比したことになり、劉裕は大変喜ぶわけである。傅亮が意識したのは恐らくこの点であろう。昔人を追懐する典故は非常に多いにもかかわらず、夷門監者を典故として用いたのは、劉裕を漢の高祖に比することができるからであろう。こう見てくると、下の二句の僻典とも言うべき、随會を典故に用いたことも説明がつく。「春秋左氏傳」文公十三年に随の士會のことが記されているが、秦に居た士會を自国の安全の為に晉が連れもどしたという話がくわしく述べられている。そしてその最後に「其處者爲劉氏」という一句がくっついている。疏家達はこの句が漢代の左氏学者によって、王室におもねる為に、挿入されたのではないかと疑っている。そういう問題の有る一句であるが、実はこれが漢の高祖の家系の初めとされている。とすれば「随會」も漢の高祖に関係した典故ということになる。うがった見方をすれば、劉裕は或はこの文章を読み、作者傅亮の説明を聞いて初めて、劉氏の最も古い記録を知ったのではなかろうか。傅亮の説明を聞く劉裕は大変満足したに違いない。因に漢の高祖に結びつけたことを証明するものとして、「文選」中の「九原」の用例を見てみると、傅亮の語をよく典故の如く引用する任昉と沈約に例があるが、それは「寧容使長想九原」とか、「誰當九原上、鬱々望佳城」とあって、随士會までは引用が及んでいない。随會は傅亮だけに必要であったのであろう。

結局この四句の特長は、劉裕の喜ぶような典故をさりげなく配置した、ただし表現は字数を変えて六字句として特に目立つようにした、いかにも功利的な技巧にあると言えよう。

次に前の重要な（傅亮にとって）四句を受ける二句であるが、これ亦前の句の典故のしめくくりとなる部分である。「擬之若人、亦足以云」（これを若人に擬す、亦もって云ふに足る）「若人」とは李善注によれば、「論語」公冶長の「子謂子賤、君子哉若人」を典

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

故とする。「このような人」の意である。従って「擬之若人」と言えば、張良を侯嬴や随會に擬すということである。とすれば当然、今張良の廟の前に立つ劉裕は、侯嬴、随會を追懐する漢の高祖に擬されることになる。ここまでダメをおされれば劉裕もうれしさをかくすことは出来なかったろうと思われる。次の「亦足以云」は非常に口語的であるが、「文選」中の用例を見ると、左思の「魏都賦」に「張儀張禄、亦足云也」とか、司馬遷の「報任少卿書」に「事已無可奈何、其所摧敗功、亦足以暴於天下」とか、陸機の「辨亡論」の「抑其體國經邦之具、亦足以爲政矣」などの例の如くである。いずれも「～するのに十分の才能がある」という意味であろう。この四字句は恐らく当時も口語の中に使われていたのではないかと思われる。特にこの部分は劉裕にわかり易いようにとの配慮があったと考えるのはうがちすぎであろうか。

以上六句が廟を修理する正当性を論じた部分となっている。以下の文が本来ならこの教の中心に来るはずの命令の内容を述べた部分である。「可改構棟宇、脩飾丹青、蘋蘩行潦、以時致薦」。上二句は典故とてないが、下二句は、李善によれば、「左氏伝」の隱公三年の「蘋蘩薀藻之菜、潢汙行潦之水、可薦於鬼神」が典故であるという。廟をおまつりするにはふさわしい、しかも非常に素直な典故の引き方である。そして最後の廟を修復する意義を述べてしめくくったことばである「抒懐古之情、存不刊之烈」（懐古の情を抒し、不刊のいさおしを存せん）というのも「左氏伝」の序文の「經者不刊之書也」をふまえたものであるが、まことに素直な典故の引き方である。ただ、廟修復という劉裕の業を「不刊之烈」と經書並みの重さをもたせれば、劉裕も最後まで満足してこの文章を読んだことであろう。

全文を簡単にまとめてみると、最初の四句はテーゼの提示部分で、経書を引用した斬新な表現が特長である。次の八句は張良の人柄をほめた部分で、やはり経書を典故とした斬新な表現の裏に重厚な典故を結びつけた傅亮独特の表現法が特長である。次の八句も張良の人柄をほめた部分であるが、老荘的な面からほめたもので、典故としては漢代以降の文学作品を多く使用する。次の十二句は劉裕が張良の廟を修復することになったいきさつと意義をのべた部分で、典故としてきわだったものは少ないが、劉裕を喜ばせるような典故が、さりげなく、しかも目立つように使われているのが特長である。最後の七句が、官吏に修復すべき内容を述べた部分で、いわば本論であるが、これまでの四、八、八、十二、合計三十二句とくらべて非常に簡単である。

対句については全く言及しなかったが、傅亮らしい特長のある典故を使った部分は、ほとんど対句で、ここにも大変気を使っているようである。対句についての考究は別の機会にしたい。

以上大まかにこの文章の表現の特徴を、典故をもとにした文章ということを念頭において見てきたが、最後にこの文章の特徴として特にとり上げるべきものをまとめておこう。

一、典故を使う際、文法を無視してまで、抜き出し方に特異性をもたせ、意味上では典故を想像、連想させるが、表現上では新しい言語、つまり造語という感じを与える。これはまとめてみると、意味上の古典的表現法と、言語表現上の創造的斬新的表現法の二つを、同時に兼ねそなえた表現法であるといえよう。

二、典故にはもとづかないが、「照隣」「參軌」「撫跡」など、他

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

の人々の使わない表現、傅亮独得の表現が見られる。

三、後の六字句の所で見られたように、主君劉裕を喜ばせる為の典故使用にかなり努力していること。これは表現方法の問題とは少し離れて、作者の意識の問題である。

四、「微管」「如仁」の如く自分を劉裕に売りこむかのような表現が見られる。これは三とも関係することである。

五、典故として使われた書の中で、「周易」がかなりの比重を占める。一体こういう文章では「尚書」が典故として使われ易い。しかし傅亮のこの文章では、重要な表現部分の典故は殆んど「周易」である。

以上五つばかり特徴をあげたが、昭明太子が、この点が文学的だと認めたのは、一と二であろう。典故の利用の巧みさと言語の斬新さである。ただ傅亮の場合は、この二つが不可分の関係にあり、一つの言語にその両方の特徴が含まれるという点こそ、最大の特徴であろう。

「爲宋公修楚元王墓教」の分析と、劉裕の作とされている文章の中から傅亮の作品を選別する考証とがこの後に続くが、この二つをまとめて次号にゆずる。本論文とこの二つを合わせた論で――傅亮の場合――を終ることになる。

NII-Electronic Library Service